

桧隈寺第2次の調査

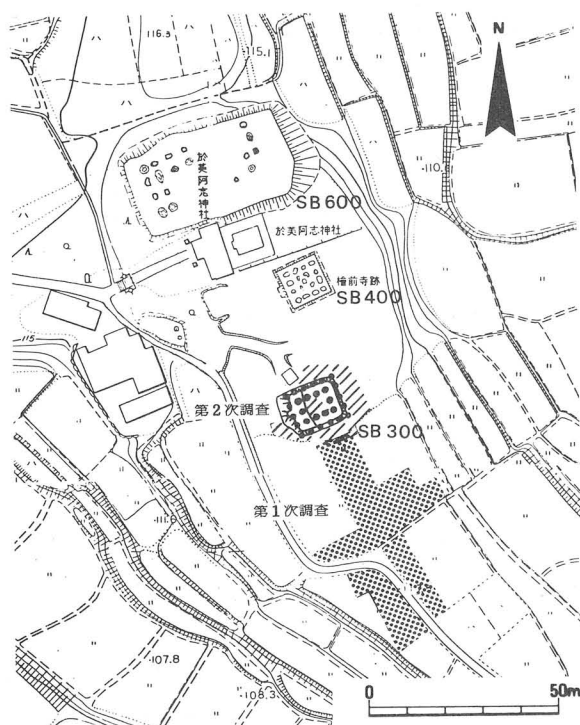
(昭和55年8月～昭和55年11月)

東漢氏の中心氏族桧隈氏の氏寺として建立された桧隈寺について、昭和54年から発掘調査を行っている。第1次調査は、南門の検出を目的としたが、顕著な遺構は検出されなかった。そこで、今回の第2次調査では、中門推定地の土壇状の高まりに焦点を合わせて発掘調査を行った。

その結果、金堂と推定される礎石建物SB300と、中世以降の土壇、ピットおよび溝を検出した。なお、発掘区南端の一部は第1次調査地と重複する。

SB300の遺構 発掘前のSB300の基壇は、東西18m、南北15m、高さ1.7m程の方形の土壇で、その上面に礎石が4個露出していた。

調査の結果、SB300は桁行3間、梁行2間の身舎を持つ正面5間、奥行4間の礎石建物であることが確認された。礎石は全部で11個あり、すべて原位置

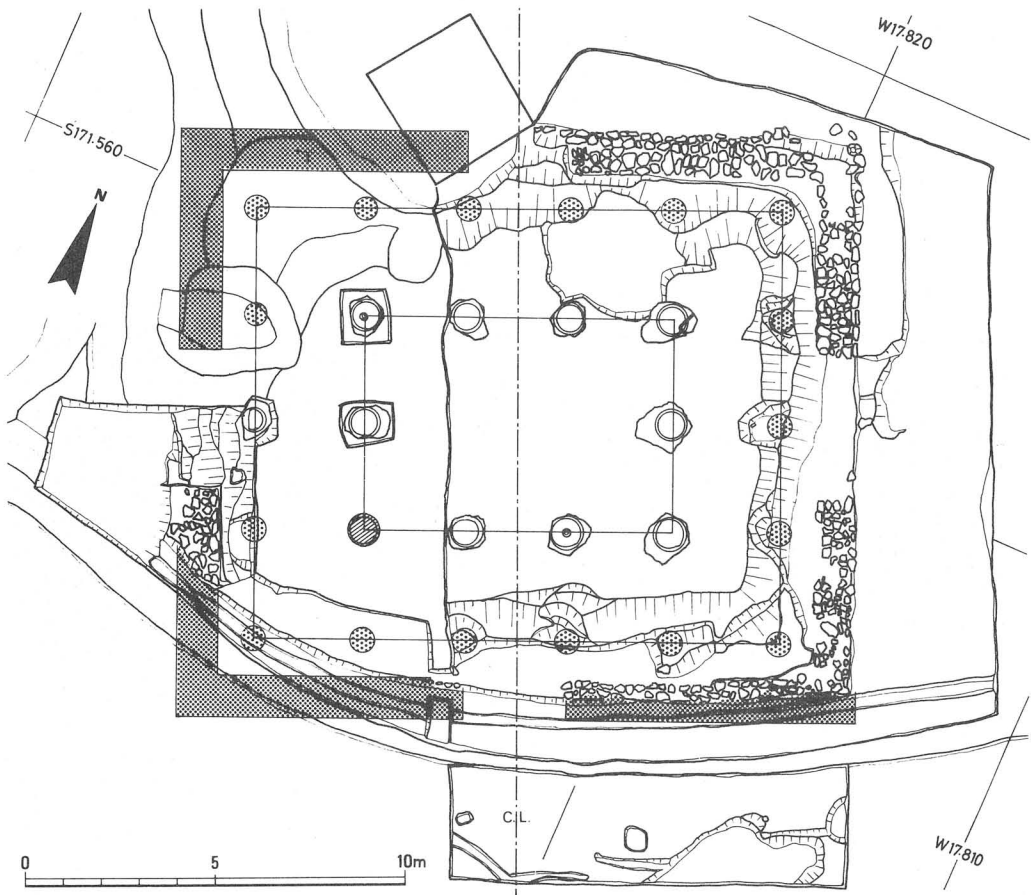


調査地位置図(1:2000)

を保っている。身舎の礎石は全て存在するが、側柱の礎石は棟通り西端の1個のみが残存していた。その他の礎石はすべて抜取られている。抜取痕跡は西側柱列の南から2番目で確認したが、他の箇所では木の根が土壇深く張っていたため明確には検出できなかった。礎石はすべて花崗岩製で、円形の柱座が造り出されている。柱座は身舎で径0.75～0.80m、側柱で径0.7m程である。身舎の礎石には、柱のあたりが残存するものがあり、

それによれば柱直径 0.605 m となる。なお、身舎の 2 個の礎石上面には、径約 0.2 m の小穴を穿ったものがある。後世の加工とも考えられるが性格は不明である。また、残存した側柱の礎石の柱座は円形ではなく、弧の $\frac{1}{4}$ が直線となる半月状を呈する。柱間寸法は身舎の桁行が 2.72 m，梁行が 2.81 m，側柱の桁行は 2.88 m である。造営尺は完数を得ようとすれば、一尺 = 0.303 m となる。この数値をあててみると、身舎の桁行 9 尺等間，梁行 9.3 尺等間，廂の出は 9.5 尺等間に復原でき、桁行総長 13.92 m，梁行総長 11.38 m となる。

基壇は四面に階段のとりつく二重基壇であったと推定できる。下成基壇は、花崗岩を主体とした人頭大の扁平な河原石を約 1.1 m の幅に敷き並べたもので、基壇の外周には縁石をめぐるしている。基壇上面は内側がやや高いゆるやかな傾斜面をなす。上成基壇については凝灰岩の痕跡が認められず、また、瓦積み



遺構配置図 (1 : 200)

基壇とみるべき痕跡も認められないことから、どのような構造であったか詳細は不明であるが、あるいは玉石を積んだものであったのかも知れない。基壇規模は、下成基壇が外縁で東西 17.95 m，南北 15.5 m（約 59 尺，約 51 尺）になる。上成基壇は、その基壇端を仮に下成基壇敷石部外縁から内に 0.8 m の位置とすれば、東西 16.35 m，南北 13.9 m（約 54 尺，約 46 尺）となる。基壇総高は 1.3 m で、うち上成部は 1.15 m，下成部は 0.15 m となる。

基壇築成にあたっては、下成基壇の範囲の地山を削り出し、その上面を整えた後、版築層を重ねている。黄褐色粘質土と赤褐色ないし黒褐色粘質土を交互につき固めたもので、厚さ 2～4 cm の版築層を高さ 0.8 m にわたって重ねている。礎石は基壇築成中に根固め石を用いずに据え付け、さらに版築を重ねて固定している。なお版築土中にはわずかではあるが 7 世紀前半の須恵器、土師器の小片が含まれていた。下成基壇は先に築成した基壇の四周を削り込み整形する。石敷は厚さ 0.1～0.2 m の裏込め土を置いたのちに敷設している。階段は下成基壇を整形する際に基壇各辺の中央を削り残して作っているが、現状では著しく削平されており、わずかに痕跡をとどめるにすぎない。この部分には下成基壇面の敷石がなく、その幅は南辺と北辺では 2.73 m，東辺と西辺では 3.75



SB300 全景（南から、後方の十三重石塔は塔跡に建つ）

mである。但し、東・西両辺の階段については、南・北両辺に比べて幅が広く、取り付けの側柱礎石に加工痕があることから、あるいは回廊が取り付けられていたとも考えられる。



下成基壇（北西から）

SB 300 周辺の遺構 調査

地の基本的な層序は表土，暗褐色土，黄褐色土，地山となり，

地山直上まで12世紀以降の遺物が含まれていたが，焼土層や炭化物層は存在しなかった。検出した主な遺構は，いずれも12世紀以降のもので基壇東辺の溝，南辺の水田地区の土壌，ピット，溝等がある。従って SB 300 の基壇周辺は，12世紀以降大幅な削平を受けていたと考えられる。

出土遺物 瓦，土器，金属製品，玉類がある。

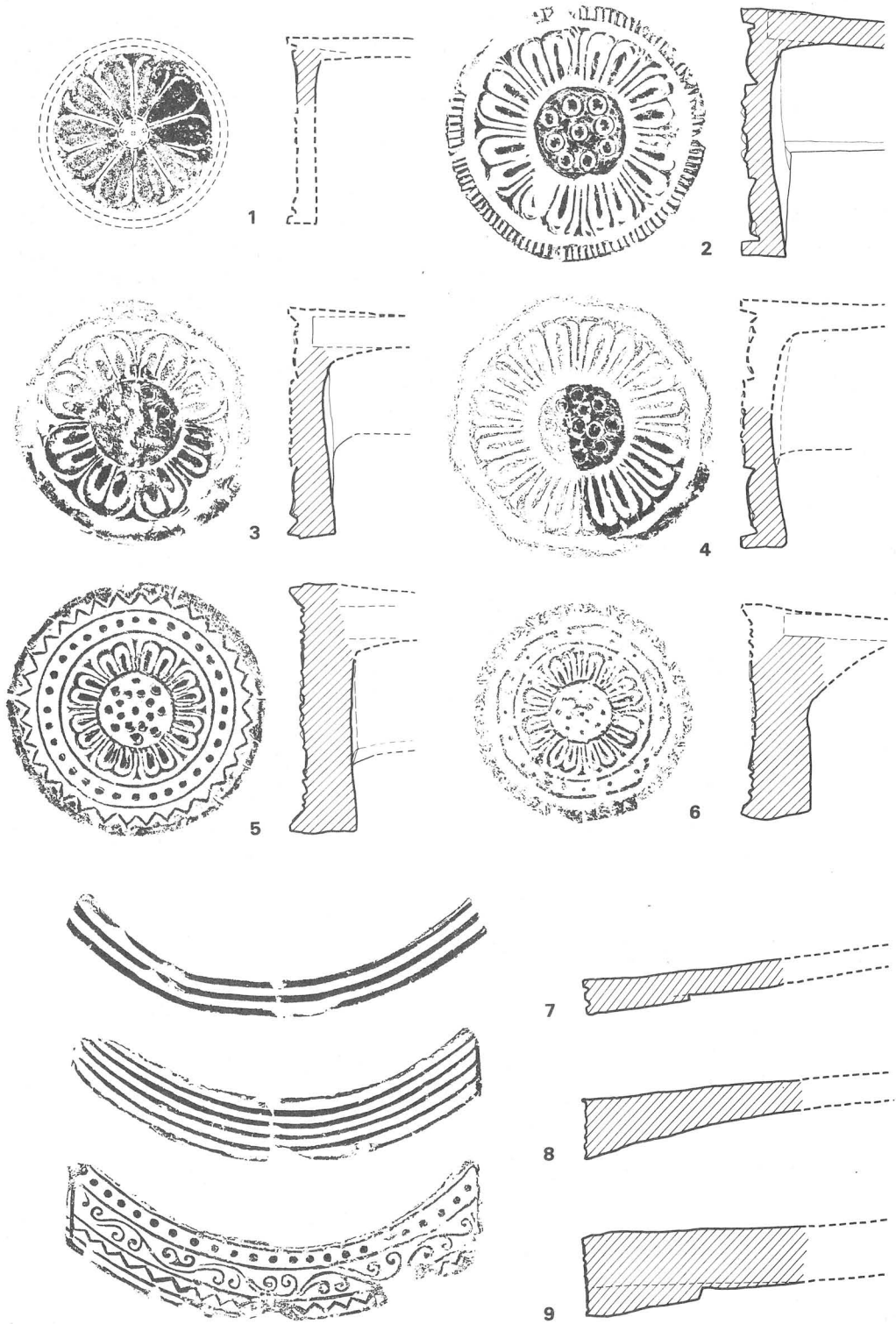
瓦は基壇上面および基壇周辺から出土した。特に北辺で多量に出土した大形破片は SB 300 の使用瓦と推定される。その他の三辺では小破片が多く，12世紀以降，破碎・整理されている形跡がうかがえた。

出土した瓦には，軒丸瓦，軒平瓦，榼先瓦，尾榼先瓦，鬼瓦および多量の丸・平瓦がある。

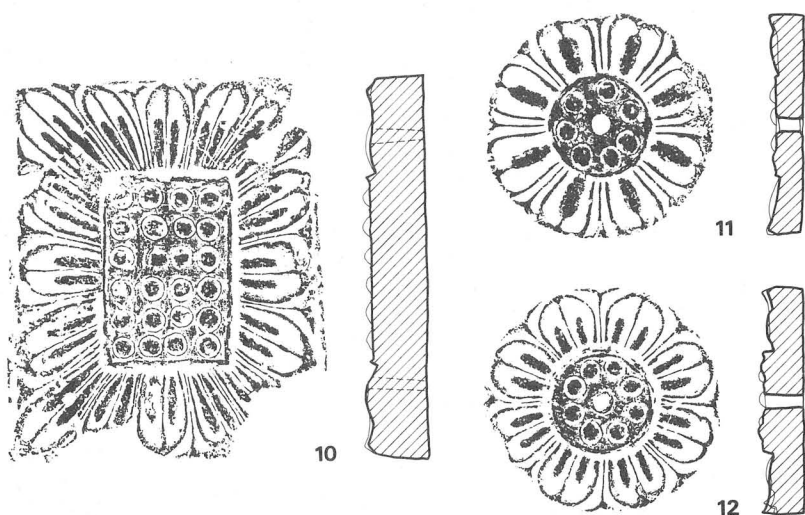
軒丸瓦は4型式9種ある。I型式はA・Bの2種がある。A（1）は素弁十弁蓮華文で，弁端はやや反転して盛り上がる。B（概報10，p52の1）は素弁八弁蓮華文で，花卉中に接続する複子葉と左右4条ずつ楔形の火焰を線で表現する。中房に1+4の小蓮子を配するものである。II型式は複弁八弁蓮華文で4種ある。A（2）・B・D（4）は直立縁に輻線文を配した，いわゆる「桧隈寺式」と称されるものである。Bの類

| | 型式 | 点数 |
|-----|-------|-----|
| 軒丸瓦 | I A | 1 |
| | B | 5 |
| | II A | 80 |
| | B | 1 |
| 軒平瓦 | C | 4 |
| | D | 1 |
| | III A | 15 |
| | B | 4 |
| 計 | IV | 4 |
| | 計 | 115 |
| 軒平瓦 | II A | 56 |
| | B | 39 |
| | C | 29 |
| | D | 15 |
| | III A | 36 |
| 計 | IV | 3 |
| | V | 2 |
| 計 | 計 | 180 |

出土軒瓦分類表



軒瓦表測圖 (1 : 5)



尾極先・極先瓦実測図（1：5）

例（奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』の291）によれば、BはA・Dに比べて中房の高さや蓮子の配置が違い、Bの子葉がやや細身であるが、全体としては良く似ている。A・B共に1+8の円圈付大形蓮子を配する。D（4）は中房の蓮子が1+4+8である。C（3）は外縁に粗い線鋸齒を施すもので、子葉の盛り上がりが高く、大形の中房に1+8の蓮子を配する。Ⅲ型式は藤原宮式に類似する複弁八弁蓮華文で、A（5）・B（概報10，p52の3）の2種がある。Aは6275 G型式で中房の蓮子が1+8+8，Bは1+4+12である。いずれも外縁は粗い線鋸齒の傾斜縁である。Ⅳ型式（6）は6275系の複弁八弁蓮華文で、Ⅲ型式に比べて小形化している。中房の蓮子は1+4+8である。

軒平瓦は4型式8種ある。Ⅱ型式は重弧文で、A（概報10，p52の7），B，C（7），D（8）の4種ある。ABC共に三重弧文である。いずれも段顎で、Aの顎幅が最も広い。Dは范作りによる五重弧文で、曲線顎である。Ⅲ型式は6641系で、A（9）・B（概報10，p52の9）の2種あるが、今回はAのみ出土した。ほとんどが両脇区を切り落している。段顎である。またそのうち文様の途中で切ったり下脇区を切り落したりして、瓦当面を切り縮めるものがある。Ⅳ型式は東大寺式の均整唐草文で、6732 A型式である。Ⅴ型式は、平安時代末期以降の段顎の発達した軒平瓦である。

榿先瓦は円形で、A（11）・B（12）の2種ある。Aは単弁、Bは複弁の八弁蓮華文で、円圈を持つ大形蓮子をそれぞれ7個と8個配する。A 60点、B 38点出土した。尾榿先瓦（10）は複弁十六弁蓮華文で方形を呈する。縦25.3 cm、横20.1 cmで方形の中房に円圈を持つ大形の蓮子を、縦6個、横4個計24個を方格状に配置する。四方の隅に各1個ずつ釘穴がある。21点出土した。鬼瓦には鬼面文鬼瓦片が1片ある。そのほか、丸瓦凸面に「□□^[瓦カ]□□」とヘラ書きした文字瓦が1点ある。

多量に出土した丸・平瓦は凸面縄叩きのものが主体をなすが、凸面格子叩きも存在する。また、川原寺出土例で知られる凸面布目の平瓦が存在する。

軒瓦の出土比率を見れば、軒丸瓦ⅡのA B Dと軒平瓦ⅡのA B Cで、それぞれの7割を占めている。これらと組み合わせると考えられる榿先瓦・尾榿先瓦を含めれば、出土軒瓦の8割を占めることになる。

土器は基壇版築土出土の7世紀前半の土師器・須恵器と基壇周辺から出土した7～8世紀の土師器・須恵器が少量ある。また、基壇上面および周辺から12世紀以降の土師器・瓦器・青磁等が出土している。

金属製品には、鉄釘、金銅製の飾り金具・金折り金具・止め金具、鋳銅製品、玉類には小形の丸玉と乳頭形をしたものがある。

まとめ 今回の発掘対象地の土壇は、従来中門と考えられてきた。しかし、予想に反して、桁行3間、梁行2間の身舎に四面廂のつく礎石建物 SB 300 が確認された。

SB 300 は身舎の柱間が桁行9尺等間、梁行9.3尺等間、廂の出が9.5尺、側柱心から上成基壇の推定縁までの距離は4尺に復原できる。廂の出が身舎の柱間より広く、基壇の出が著しく狭い平面構造は同時代の遺構に類例がなく、建物はかなり特異な構造のものであったと推定される。建物の平面規模の状況に加えて、礎石が、寺域内に残存する他の堂塔の礎石に比べて大きく、加工もすぐれていること、あるいは基壇面が最も高いレベルに位置することなどから、SB 300 は桧隈寺の金堂であったと推定するのが最も妥当であり、かつて考えられていたような中門でないことが明らかになったのである。

SB 300 の建立時期は、出土瓦から言えば、幅線文を持つ複弁八弁蓮華文軒丸瓦・三重弧文軒平瓦および槿先瓦・尾槿先瓦が出土瓦の 8 割以上を占めることから、7 世紀後半に比定できる。基壇築成土中から 7 世紀前半の土器が出土することも、その傍証になる。『日本書紀』朱鳥元年（686 年）の桧隈寺の記事は、SB 300 の年代の一端を示すものであろう。SB 300 は出土瓦の状況からみて 8 世紀後半のある時期までは改修、維持されたが、それ以後瓦に見るべきものがないので、9 世紀に入れば衰退していったと推定される。廃絶の時期は、基壇周辺が削平を受けた 12 世紀頃と推定される。塔 SB 400 も十三重石塔の年代から、少なくとも平安時代末には廃絶したと考えられている。

SB 300 の建物方位は、真北に対して約 $23^{\circ}19'$ 西に偏する。これをそのまま北西に延長すれば、SB 600 の中軸線にほぼ一致する。また塔の建物方位は、真北に対して約 $24^{\circ}39'$ 西に偏している。伽藍中軸線は、まだ確定していないが、真北に対して $23^{\circ}\sim 24^{\circ}$ 前後西に偏するか、あるいはこれに直交するものと思われる。これは、桧隈寺が北西に延びる丘陵に立地していることから、おそらく地形に制約されたものであろう。

伽藍配置については、従来法起寺式あるいは薬師寺式の配置をとり、南面すると考えられていたが、SB 300 が金堂に想定されることになったため、再検討の必要が生じた。しかし、過去の調査結果や塔および SB 600 の位置を考慮しても、桧隈寺の伽藍配置については不明な点が多く残されている。今後の調査を待ちたい。